

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23500688

研究課題名(和文)「身体教育(体育)によって育てる間身体性」の解明

研究課題名(英文)Elucidation of intercorporeality in physical education and sport

研究代表者

石垣 健二(Ishigaki, Kenji)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20331530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：「間身体性」とは、人間の関係性の基盤であり、それは「自己と他者」の身体の間で相互理解を可能にする「身体の働き」であると同時に、そこで得るところの「身体的な感じ」である。体育やスポーツにおける身体運動の実践のなかでは、「身体的な感じ」を得ることによって、「身体的な感じ」としての「われわれ」が成立するのであり、このことが間身体性の育成にほかならない。したがって、学校教育でおこなわれる体育やスポーツの身体活動は、子どもたちにとって殊に重要である。今後、体育学における間身体性の研究は、他者の身体運動を記述する方法論の構築とその方法による具体的な「身体の働き」の抽出が必要となるだろう。

研究成果の概要(英文)：“Intercorporeality” is a foundation of human relationship. That is bodily functions which are able to understand between the bodies of the self-the other and also is bodily feelings which experienced in human movements. Recognition of “We” in bodily feelings is formed by acquiring bodily feelings in practices of physical education and sport and is no other than intercorporeality. Therefore it is especially important for schoolchildren to practice physical education and sport. For the future, studies of intercorporeality in physical education would require construction of method for describing the movement of the other and require extraction of the concrete bodily functions by using the method.

研究分野：体育哲学

キーワード：間身体性 間主観性 身体的経験 身体的対話 身体的な感じ 身体的なわれわれ

1. 研究開始当初の背景

我が国の社会において、「他人とコミュニケーションができない子どもたち」といった子ども観が叫ばれるようになってから久しい。こうした状況のなか、学校教育は教育学や教育心理学の見解を礎としながら、子どもたちが言葉によってかかわる授業、あるいは「コミュニケーション(ソーシャル)・スキル」を使用して交流する授業を展開してきた。確かに、理性的・知性的に言葉によって他者と「わかり合う」ことは重要であるし、また他者にわかってもらうためのコミュニケーション・スキルを身につけることも重要だろう。もちろん、こうした教育実践は一定の効力をもつに違いない。しかしながら、人間同士の友好関係は、他者を理性的・知的に理解することのみでは決して達成されないということもまた事実である。それは、現実の人間同士の関係を考えてみれば明白である。人間(他者)を理性的・知的にわかるというその認識のあり方は、人間を「主観性」という側面から理解することに過ぎないからである。よって、そうした間主観的な「わかり合い」とは異なる認識のあり方が模索される必要があるだろう。

2. 研究の目的

昨今の子どもたちの「かかわり」を鑑みるならば、それは、単に理性的・知的な「わかり合い」という視点からだけでなく、身体的な「わかり合い」という視点からも考察される必要があるだろう。それは、子どもたちの「かかわり」を、主観性と主観性(間主観性)の問題としてではなく、身体性と身体性(間身体性)の問題として検討しなければならぬということである。とはいえ、そもそも他者を「身体的にわかる」ということとはいかなることなのだろうか。理性的・知的にではなく、他者を「身体的にわかる」というその意味が、まず問われる必要があるだろう。また「身体的にわかる」ということを可能にするところの「間身体性」は、一体いかにして育つ(構造化される)のだろうか。その構造が問われなければならないだろう。身体性という限り、それは何らかの形で「身体」や「身体運動」と深く関わっているはずである。

本研究の目的は、「他者を身体的にわかる」というその意味を明らかにするとともに、身体運動の実践(身体教育)によって育つ「間身体性」を明らかにすることである。

3. 研究の方法

次の〔1〕～〔3〕を総合的に検証しながら、身体運動の実践のなかで「他者を身体的にわかる」というその意味を省察するとともに、そこで働く「間身体性」のメカニズムを明らかにする。

〔1〕まず、哲学および社会学の領域におけ

る「人間の認識」に論究する研究(認識論や知覚論)あるいは「他者論」「他者理解」等に関わる学説を批判的に読みすすめ、それらの論議を整理するとともに、その限界を見極める。たとえば、現象学および現象学的社会学の領域では、フッサール、E.『イデーン』やシュッツ、A.『社会的世界の意味構成』が、他者とわかり合うという現象を「間主観性」という術語によって説明している。その妥当性を見定めながら、人間(他者)を全体として認識するためには、どのような視点が補完される必要があるのかを検討しなければならない。それら考察を通して、人間の「主観性」(「間主観性」)ではなく、「身体性」(「間身体性」)の視点に注目する必要があることを導き出す。

〔2〕教育学および教育哲学の領域における「自他関係論」や「教育関係論」等に関わる学説を批判的に読みすすめ、教育学が展開しようとする理性的・知的な他者との「わかり合い(理解)」だけでは限界があることを示す。他者との「わかり合い」ということにも、理性的・知的なそれだけでなく、身体的なそれが重要な意味をもってくるに違いない。近年の教育哲学の領域では、佐藤学『学びの身体技法』や矢野智司「非知の体験としての身体運動」の論議では、確かに身体の問題を扱おうとしているが、それら論議は、身体運動の実践を精確に捉えきれていない。本研究の目的からすれば、身体運動の実践を精緻に描き出しながら、そこから抽出される「身体性」(身体の働き)に注目しなくてはならないだろう。

〔3〕体育学・スポーツ科学の領域における「『かかわり』を重視した体育論」や「『身体・体・からだ』を重視した体育論」等を批判的に検討する必要がある。たとえば、松田恵二『「かかわり」を大切にした小学校体育の365日』や出原泰明『異質協同の学び』は、他者との「かかわり」に重点をおいて体育論を展開しているが、結局そこでは「楽しさ」の共有や、あるいは知的理解の共有によって他者との「かかわり」が深められる方法がとられる。また久保健『からだ育てと運動文化』や高橋和子らが展開する「体ほぐし論」は、「からだ(体)」の視点を重視しようとするが、そこでは身体的事象と心的事象が交錯して論じられ、身体の育成論としては不十分な議論であるといつてよい。よって、その限界を論じたうえで、現象学的方法にのっとり身体論を展開する滝沢文雄『身体論』の議論や、「身体的」「身体性」という視点を検討する Paddick, R. の議論あるいは Osterhout の「Physicality」の議論、さらには Arnold, P.J. の「ムーヴィセプト」の議論を参考にしながら、「身体的にわかる」ということの意味を明らかにする。

4. 研究成果

次のように、年度ごとにその研究成果を示す。

〔1〕2011年度の研究成果

本研究課題の最初の成果として、2011年7月に日本体育学会体育哲学科会夏期研究会において「体育学において『間身体性』を問うための予備的考察」を口頭発表した。この研究は、「同タイトル-副題:「間主観性」の概念についての検討-」として、体育哲学研究第42号(2012年3月)に掲載された。本研究課題は、体育(身体教育)およびその他身体運動によって間身体性が育成されるその根拠をつきとめようとするものであるが、その前提として間身体性の理論的基盤となる間主観性の概念について、その問題領域を整理している。間主観性の概念は、主に哲学、社会学、発達心理学、精神分析学等の領域において議論される概念である。本研究では、それら領域の間主観性の概念を整理し、結果として、間主観性の問題領域として次をあげた。1. 具体的な他者についての問題。2. 抽象的な他者についての問題。3. 他者との友好関係および親密性についての問題。4. 「他者をいかにして語りうるのか」という問題。5. 間身体性との関係の問題。これら問題領域は、間身体性の概念を検討する際にも、有効な視点となるものである。

また、第二の成果として、2011年9月には「『体育哲学の立場からみた体育授業の成果と課題-現象学的方法の可能性』を口頭発表した。本研究では、体育や身体運動を科学的に分析する研究法を批判的に検討したうえで、それらの研究法が看過する部分に焦点をあてる必要があること、そしてそれを記述する方法として現象学的方法がもつ可能性について検証している。本研究課題をすすめるにあたり、この現象学的方法は有効な研究方法論となり得る。以後、現象学的方法を具体的な手順として示す必要があるだろう。

〔2〕2012年度の研究成果

本年度の研究成果として、「体育・スポーツ哲学研究」34-2(2012年12月)に掲載の論文「『身体的な感じ』とは何か:対話を『身体的にするもの』についての考察」(審査付論文)がある。当該論文では、体育(身体教育)やスポーツ活動における「かかわり」を「身体的対話」と位置づけたうえで、その対話が「身体的」であるということの意味について検討がすすめられた。そして「対話」を「身体的」にするために不可欠となるのが「身体的な感じ」であり、結論として、「身体的な感じ」を次のように定義している。「身体的な感じ」とは、ある身体運動にともなって運動主体が経験する「感じ」のゲシュタルトであり、それは自らの身体の感じと他者の身体の感じ、および外界の事物に対する感じのゲシュタルトである。本研究課題にとって、

「身体的な感じ」の定義づけがおこなわれたことの意義は大きい。というのも、以後、体育やスポーツ活動における「間身体性」を検討するにあたり、明確な分析視点が得られたからである。

また、本年度の研究成果として、国際スポーツ哲学会第40回大会(2012年9月)において発表された「A Domain of Physical Experiences: Physical feelings, physical dialogues and intercorporeality(身体的経験の領域:身体的な感じ,身体的対話,間身体性)」がある。当該発表は、「対話」と「身体的対話」の領域を比較検討しながら、体育やスポーツ活動において、「間身体性」が育成される可能性を論じており、「間身体性」を直接検討したという意味で、本研究課題にとって重要であった。

〔3〕2013年度の研究成果

本年度の成果として、まず日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会における口頭発表(「体育学における『間身体性』の問題領域」)[2013年7月]がある。ここでは、メルロ=ポンティ,M.の身体論を中心に検討しながら、体育学として「間身体性」を解明するための問題領域が整理された。この内容の一部は、「メルロ=ポンティ,M.における『間身体性(あるいは「肉」)』についての検討」として、「体育哲学研究」第44号に掲載された。そこでは、「間身体性」や「肉」の概念が「主体-客体」「能動-受動」といった自己と他者の関係性を転換する働きとしてとらえられ、それらが体育(身体教育)における自己と他者の関係性の基盤として位置づく可能性を論じている。

また本年度の研究成果として、日本体育学会第64回大会における口頭発表(「身体的経験」の領域:身体的対話と間身体性についての考察)[2013年8月]がある。ここでは、体育(身体教育)における経験が、「身体的な感じ」を経験するという意味での「身体的経験」であることを論じながら、「心的経験」と比較しながらその領域が明示された。そして、その身体的経験のなかにおいては、自己と他者との「身体的対話」が成立し、そこにおいて「身体的な感じ」としての「われわれ」という認識が獲得されることを論じた。

〔4〕2014年度の研究成果

本年度の研究成果として、次の論文が公開された。「身体的経験」および「身体的対話」の領域:「間身体性の教育」としての学校体育再考,体育学研究,59-2.本論文は、「身体的経験」と「身体的対話」の領域を明らかにすることによって、「間身体性」が育成されるその条件を示そうとしている。というのも、体育学においては、永らく「身体的経験」の重要性が論じられてきたが、その経験が「身体的」であるということの意味を無自覚に前提してきた。体育学はその「身体的経験」

がいかなる領域であるのかを問うとともに、そこにおける他者との「身体的対話」のなかで何が生じているのかを検討する必要があったのである。結果として、「身体的経験」や「身体的対話」は、「身体的な感じ」を中核としたそれとなること、そしてそのなかで「身体的な感じ」としての「われわれ」すなわち「身体的なわれわれ」が成立するプロセスが明らかにされた。この「身体的なわれわれ」とは、「間身体性」にほかならない。

また、本年度の研究成果としてあげられるのは、体育哲学の研究者に、「体育学における『間身体性』の問題領域」について精緻な批評を受け、見解の妥当性を確認できたことである。「間身体性」の問題領域は、次の5点として整理された。1. 具体的な他者の身体運動にかかわる問題、2. 抽象的な他者の身体運動にかかわる問題、3. 体育学における「間主観性」批判、4. 「他者の身体運動をいかにして論じるか」という問題、5. 「『身体(的)』という視点から問う」とはいかなることかという問題であった。体育学における「間身体性」の研究は、今後これら5点を基礎にして展開され得るだろう。

〔5〕研究成果の総括と今後の展望

体育やスポーツのなかで得られる人間の関係性があるのであれば、それは「間身体性」にほかならない。間身体性は、単なる間主観性ということとは異なっている。そこで中核となるのは「身体的な感じ」(下記:論文)であり、体育やスポーツは他者を身体的な感じとして了解するための格好の条件となるのである。というのも、体育やスポーツが提供する身体的経験や身体的対話は、その条件のもとで他者とかかわることによって、「身体的な感じ」としての「われわれ」(「身体的なわれわれ」という認識を成立させるのである(論文)。)。そうであれば、学校教育における体育やその他身体活動は、殊に大きな意義を担っていることになるだろう。コミュニケーションを苦手とする現代の子どもたちは、心理学的な手法のみによってだけでなく、実際の身体活動を通して他者と「身体的な感じ」としての「われわれ」という接点を見出しうることになるのである(論文)。

本研究成果は、身体教育によって育成される「間身体性」の問題領域とその全体像を明らかにした。しかしながら、間身体性が他者に対する「身体的な感じ」であると同時に他者に対する「身体の働き」であるとするならば、それは具体的にどのような働きとして構造化されているのか、そして、それを明らかにするための具体的方法論が、今後問われる必要があるだろう。というのも、哲学や心理学の領域は、他者を論じるための方法論として「現象学的方法」や「間主観的アプローチ」等を提案し、一方において体育学は、身体運動を論じるために「モルフォロジー考察法」や「体育学における現象学的方法」を提出し

ているが、両者ともに限界がある。それらを統合しながら他「者の身体運動」を精確に論じるための方法論が新しく構築されなければならぬのである。そしてその方法にもとづき、他者の身体運動を精確に記述することによって、間身体性がいかにして育成されるのかその構造を抽出することになる。今後さらに、「間身体性」の構造について論究してゆく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

石垣健二(2014.12.)「身体的経験」および「身体的対話」の領域:「間身体性」の教育としての学校体育再考,査読有,体育学研究,59-2,483-495.

石垣健二(2014.3.)メルロ=ポンティ,M.における「間身体性(あるいは「肉」)」についての検討:体育における「自己と他者」のかかわりの基盤として,査読無,体育哲学研究,44,29-34.

石垣健二(2012.12.)「身体的な感じ」とは何か-対話を「身体的にするもの」についての考察-,査読有,体育・スポーツ哲学研究,34-2,107-124.

石垣健二(2012.9.)「体育哲学」の立場からみた体育の授業研究の成果と課題:「現象学的方法」の可能性,査読無,体育科教育学研究,28-2,27-35.

石垣健二(2012.3.)体育学において「間身体性」を問うための予備的考察-「間主観性」の概念の検討-,査読無,体育哲学研究,42,63-77.

〔学会発表〕(計 5件)

石垣健二(2013.8.30.)「身体的経験」の領域:身体的対話と間身体性についての考察,日本体育学会第64回大会,立命館大学びわこ・くさつキャンパス(草津)

石垣健二(2013.7.14.)体育学における「間身体性」の問題領域,日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会,箱根静雲荘(箱根)

Kenji Ishigaki(2012.9.12.)A Domain of Physical Experiences: Physical feelings, physical dialogues and intercorporeality, the 40th annual conference of the international association for the philosophy of sport, University of Porto (Porto).

石垣健二(2011.09.27.)「体育哲学」の立場からみた体育の授業研究の成果と課題-現象学的方法の可能性-,日本体育学会第62回大会(体育科教育学専門分科会シンポジウム):鹿屋体育大学(鹿児島).

石垣健二(2011.7.17.)体育学において「間身体性」を問うための予備的考察(1)

-哲学および社会学における「間主観性」
の概念の検討-, 日本体育学会体育哲学専
門分科会夏期合宿研究会：箱根静雲荘（神
奈川）.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

石垣 健二 (ISHIGAKI KENJI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20331530

(2)研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()
研究者番号：